

鹿島灘で二枚貝稚貝を収集する

水産業システム研究センター

研究の背景・目的

茨城県の大洗岬から千葉県の大井町にかけて広がる海域を鹿島灘といい、黒潮と親潮がぶつかりあうため、この海域で漁獲される水産物は豊富です。茨城県ではこの外洋に面した砂浜域に生息するチョウセンハマグリを「鹿島灘はまぐり」として売り出しています。これまで、波浪環境の厳しい海岸域で、二枚貝幼生の着底や稚貝の生態について調査された例がありませんでした。そこで、鹿島灘で稚貝調査を行うための採集器を開発しました。

研究成果

漁協の皆さんからの「鹿島灘の波浪に耐えうる強度が必要」というアドバイスをいただき、ステンレスフレームのカゴに樹脂ネットでカバーし、砂などの異なる基質が数種類入った袋をワイヤーで固定したものを作製しました(図1)。波崎海岸・漁港岸壁および平井海岸・岸壁にステンレスワイヤー等を使用して設置しました(図2)。大潮ごとに交換し、基質を顕微鏡で調べたところ、どの場所でも二枚貝の着底稚貝がみられました(図3)。



図1 幼生・稚貝採集器



波崎海岸



平井岸壁



波崎港岸壁

図2 設置した場所

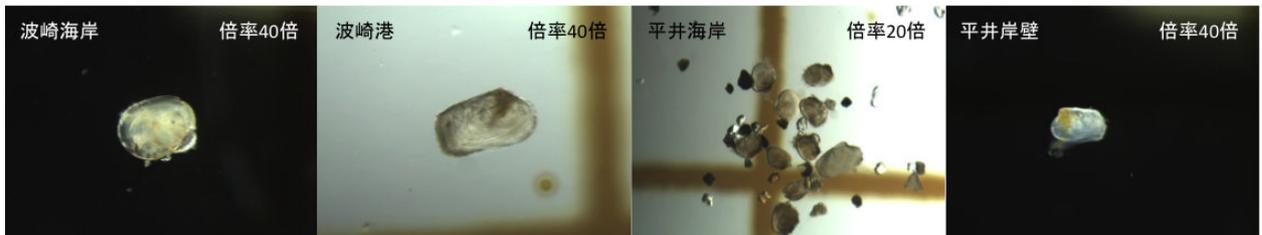


図3 観察された二枚貝の稚貝

波及効果

鹿島灘の波浪に耐えうる二枚貝稚貝採集器を開発しました。今後はこれを用いて、近年、漁獲量の減少が深刻な問題となっているチョウセンハマグリの稚貝を継続的、広域的に調査をすることで、着底期の生態が明らかになることが期待できます。稚貝を用いて、好適な環境を解明するための移殖試験も可能となります。

(本研究は、平成28年度所裁量経費所内プロジェクト研究により実施しました)

(生産システム開発グループ: 伏屋玲子、水産土木工学部: 杉松宏一・南部亮元・多賀悠子、業務推進部: 森口朗彦)